

地域経済コモンズ 学外実習の記録

文部科学省
地(知)の拠点

- ＝目次＝
- はじめに
 - 産官学民連携による地域創造セミナー…1
 - 榛原連合自治会研修会 / 宇陀市特産品認定審査委員会…2～3
 - 平城ニュータウンにおける学外活動 / 宇陀市特産品認定審査委員会…4～5
 - 地域経済コモンズゼミⅡの学外実習 / 長島リゾートなばなの里の観光調査…6～7
 - 奈良県下中小企業訪問調査…8～9
 - 生産の現場を学ぶ—食品工場の見学 / 基礎ゼミでの奈良市内の野外活動…10～11
 - 『磯城の里ウォークパンフレット』を利用した三宅町における学外実習について…12
 - 三宅町学外実習に同行して…13
 - 学会や生協との連携による学習環境の創造 / 芸術鑑賞・作品検証を通した奈良への理解…14～15
 - ビジネスプランコンテストへの参加を通じて / 地域をフィールドとした教育と調査…16～17

はじめに

奈良県立大学にあって地（知）の拠点事業の実施をみて、5年目になった。本学においては、地域創造学部発足以来、地域志向教育研究に関する先駆的成果の蓄積がある。それらを地域経済コモンズの授業に活かすために、地域における体験的学習を実施した。その背景には、産業施設の見学や生産物にふれることは、教育効果を高める上で大切であるとの考えによる。この間に、われわれの教育のために用意された学外における体験の場がこの観点から、量的な側面のみならず、質的にも充実を図られたことは、本欄の表からもわかる。

また、大学教育の場で想定されている「地域貢献」とは、学生のための教育活動に資するためのものである。その観点から地域（自治体や事業所）と大学相互の協力関係は重要であり、学生の教育の場と教材の提供に地域の諸団体より様々な協力を得た。その感謝の意味も込めて、本冊子は地域経済コモンズの活動を記した「コモンズ」誌の中から抜粋して構成したものである。編集は教員の小松原尚、下山朗、山部洋幸が担当した。

表 主な学外実習（2015年度と2016年度実施のもの）

活動日	活動のテーマや対象	所在地	対象学年
2015/05/07	キューピーマヨネーズ伊丹工場、 公益財団法人尼崎地域産業活性化機構	伊丹市 尼崎市	2年
2015/05/24	経済地理学会大会	尼崎市	3年
2015/06/12	奈良県立大学から黒髪橋まで	奈良市	3年
2015/06/20	インテックス大阪、野鳥園臨港緑地(大阪南港野鳥園)	大阪市	3年
2015/06/25	やまと錦魚園郡山金魚資料館	大和郡山市	2年
2015/07/20	奈良県立美術館にて開催の「田中一光/美の軌跡」特別展	奈良市	3年
2015/11/09	伊丹スカイパーク、大阪国際空港、 アサヒビール吹田工場	伊丹市、豊中市、吹田市	3年
2015/11/23	奈良県立美術館にて開催の 「一錦絵誕生 250年ー浮世絵版画/美の大世界」企画展	奈良市	3年
2016/01/15	トヨタ産業技術記念館、リニア・鉄道館	名古屋市	
2016/06/16	平城浄化センター、歌姫近隣公園ほか	奈良市	2年
2016/07/09	琵琶湖疎水記念館、京都国立近代美術館、 京都伝統産業ふれあい館	京都市	1・4年
2016/08/08	役場、道の駅、森林組合、民俗資料館ほか	黒滝村	1年
2016/09/01	企業訪問・社長インタビュー、機械部品製造業	奈良県	1年
2016/09/02	企業訪問・社長インタビュー、自動車整備業	奈良県	1・2年
2016/09/06	奈良県立美術館、 奈良県にゆかりの富本健吉の作品の鑑賞	奈良市	1・4年
2016/10/16	奈良地理学会のエクスカッション	王寺町	3年
2016/11/16	奈良県立美術館、『雪舟・世阿弥・珠光』展、 川西、三宅、田原本町による連携展示	奈良市	3年
2016/12/08	能の観世座・結崎ネブカ発祥の地を歩く	川西町	3年
2016/12/22	地図を手に太子道と古墳群を歩く	三宅町	3年
2017/01/12	フットマップを利用し、古代風景と陣屋町の佇まいを観察	田原本町	3年
2017/02/14	アサヒ飲料とヤクルトの工場見学	兵庫県	2年

宇陀市 × 奈良県立大学連携協力事業

産官学民連携による地域創造セミナー

～ 於）宇陀市役所、榛原総合センター ～

平成 27 年 2 月 19 日（木）、伊藤忠通学長、坂西明子教授、栗村俊夫准教授、斎藤宗之准教授の引率で、地域経済コモンズの学生 11 名が、本学と連携協定にある宇陀市を訪問。宇陀市と本学の連携協力事業「産官学民連携による地域創造セミナー」に参加しました。

この日は、10 時より宇陀市役所 3 階庁議室において、竹内幹郎宇陀市長と伊藤学長が対談をされました。対談は伊藤学長によるインタビュー形式で進められ、参加学生はその様子を見学し、宇陀市長から市政運営方針や「地域創生」についてのお話をお聞きしたほか、疑問に思ったことを質問させていただき時間もいただきました。

学生たちにとっては、普段はめったに立ち入ることのできない場で、どこかソワソワと緊張した面持ちでしたが、貴重な機会をいただき、とても良い経験になったのではないかと思います。

対談終了後は、榛原総合センターに移動して、地元宇陀で栽培されている薬草を使った料理教室（「宇陀市薬草料理教室」）が開催されました。食生活改善推進員協議会の方々の丁寧なご指導のもと、参加学生はそれぞれのチームで協力して薬草料理を作り、出来上がった料理を、昼食として美味しくいただきました。完食はもちろん、ご飯を何杯もおかわりをする学生もいました。

昼食後は、宇陀市の各団体との意見交換会が開かれ、いただいた薬草料理の感想、薬草を活かしたこれからの宇陀市のまちづくり等について、学生自身がそれぞれ思うところを述べ、地元の方々と意見を交わしました。

参加学生の中には、このセミナーで初めて宇陀市を訪れる学生も何人かいました。その意味でも、今後、宇陀市と本学とが連携協力して、取り組みを実施していくに当たって、とても大切な一歩になったと思われます。



充実した 1 日でした。



榛原連合自治会研修会

地域経済コモンズの学生が「地域が抱える課題について」発表

平成 27 年 12 月 12 日（土）、宇陀市役所 4 階大会議室において、平成 27 年度榛原連合自治会研修会が開催されました。



竹内幹郎宇陀市長のご挨拶



伊藤忠通学長のご挨拶



学生による発表の様子



意見交換会の様子

同会において、伊藤忠通学長の引率のもと宇陀市役所を訪れた地域経済コモンズの学生 11 名が、榛原地域の自治会長の方々、来賓として参席された竹内幹郎宇陀市長に対し、「地域が抱える課題について」というテーマでプレゼンテーションをし、ディスカッションを行いました。

「地域づくりについて若者はどのように思っているのか」「どのような魅力があれば宇陀市に来てもらえるか」、実際に若者の代表として学生の声を聞いて、それを地域活性に役立てていきたいという榛原連合自治会からの投げかけに対して、本学の地域経済コモンズの学生たちが応えるというかたちで、実現したのが今年度の研修会です。

プレゼンテーションは、3 本立ての内容で、県大生 11 名は各々分担して、榛原各地区の分析、調査、研究に取り組みました。まず 1 つ目には「人口データによる現状分析」と題し、榛原の人口推移を各地区、性別、年代層に分けてデータの分析と考察結果を示しました。2 つ目には「現地調査による現状分析」として、平成 27 年 11 月 21 日（土）にバスで現地に赴き、行った現地調査で得られた各地区の課題及び特性を発表しました。この現地調査は、榛原地域の各地区長と宇陀市職員の方にご同行ご協力いただき、実現したものです。そして、3 つ目は、「地域が抱える課題の解決策」として、これまでの分析と考察でわかった課題に対する解決策について、学生自身の視点から提言しました。

人口減少と人口流出が原因で起こる少子化高齢化、それに付随して起こる自治体会員の減少、コミュニティの希薄化、空き家の増加、防災と防犯、獣害対策、農地の荒廃等、さまざまな課題に対する取組みとして、日本国内で成功した事例をあげ、なおかつ、その事例を宇陀市にどう当てはめていけばよいかを学生なりに考察した結果を発表しました。

休憩を挟んで行われた各地区自治会長の方々とのディスカッション（意見交換会）では、学生たちのプレゼンテーションに

対して、自治会長の方々より数多くのご質問と貴重なご意見をいただきました。中には、「宇陀市について様々な方面から分析をしてみて、実際に現時点での宇陀市に住んでみたいと思いますか」といったダイレクトな質問もありましたが、一人一人、率直に自分の思いや意見を述べることができました。

学生にとっては、地域の中に入って行って、地域のことを分析し、地域の方々の生の声を聞くことは大変なことだったかもしれません。しかし、同時に、地域でのこのような取組みは、なかなか得ることのできない「学びの場」でもあります。これからもこういった機会を得ることで、学生たちが、社会に出て行くに当たって必要な経験と知識を身につけていくことが期待されます。

宇陀市特産品等認定審査委員会において 県大生が委員として参加をしました

平成 27 年 12 月 3 日（木）14 時 30 分から、宇陀市役所内にて行われた「宇陀市特産品等認定審査委員会」に県大生 3 名（伊島萌乃さん、稲垣昭則さん、仲健一さん）が委員として参加をしました。

この委員会は、宇陀市の農林水産物を活用した新商品の開発に対して補助をする「宇陀市特産品等開発補助事業」と、宇陀市内業者が行う販路拡大事業に対し、経費の一部を補助する「うだチャレンジアシスト補助事業」の二つの補助事業において、申請のあった案件に対して、それぞれふさわしいかどうかを審査及び認定する委員会です。

まず、各件の申請者のプレゼンテーションが行われます。それを見た各委員は、その新商品や事業に対して質問をし、委員会のメンバーが各案件に対して評点をつけます。最終的に、その評点の合計点に応じて、認定するか否かが決定されます。県大生も、感じたところ、疑問に思ったところなどを積極的に質問し、宇陀市の地域にふさわしい内容であるかどうかを審査しました。

この日は「宇陀市特産品等開発補助事業」が 3 件、「うだチャレンジアシスト補助事業」が 3 件の計 6 件の申請案件に対して審査を行いました。近年、学生の意見や提言を聞いて参考にしたいという各地域からの要望が増えています。同委員会への参加は、宇陀市の地域産業の活性化に対する取り組みの一端を知ることのできる格好の機会であり、学生にとって学ぶところも多いのではないかと思います。



宇陀市特産品等認定審査委員会の様子



右から伊島萌乃さん、稲垣昭則さん、仲健一さん

平城ニュータウンにおける学外活動 ～地域経済コモンズゼミ



2016年6月16日(木)、小松原尚教授、津田康英准教授、藤森茂准教授、山部洋幸講師の引率のもと、「平城ニュータウンの環境整備と公的サービスについて考える」をテーマとして、地域経済コモンズゼミの学外活動がおこなわれ、地域経済コモンズの2年生40名ほどが参加をしました。

この日、踏査した平城ニュータウンは、日本住宅公団（現・都市再生機構（UR））により、大規模住宅地として開発されましたが、大阪圏へのベッドタウンとしての住宅都市であるとともに、国家プロジェクトの関西文化学術研究都市の一角も兼ねて、住環境のみでなく文化・学術・研究の中心としてふさわしい街づくりを目的に開発された住宅都市でもあります。



13時に近鉄高の原駅に集合した地域経済コモンズゼミ生のこの日の活動は、その高の原駅近くにある全国的にも珍しい駅前の下水処理場である平城浄化センターの訪問見学からスタートしました。静脈系の都市インフラ整備の実態を「下水道システム」の見学を通して観察し、公的セクターによる公共サービスの質的・量的内容と存在意義について、各自で考えてみるということが目的です。



平城浄化センター 見学の様子

平城浄化センターでは、まず、私たちは生活に使用した水がどのような流れで再生されているのかという「下水処理システム」について、担当の方から実演も交え、詳しく教えていただきました。ほとんどの学生にとっては、初めて聞くお話だったので、「下水道システム」以外にも、現場で働いておられる方々の

仕事の内容等、たくさんの質問をさせていただきました。

続いて、実際に施設の中を順番に歩いて回り、浄化システムの工程を見学させていただきました。先に説明いただいた内容を踏まえての見学であり、なおかつ専門的な用語についても丁寧に教えていただいたこともあって、平城浄化センターという施設について深く知ることができました。

次の目的地は、平城浄化センターから東に10分ほど歩いたところにある音如ヶ谷公園という都市公園です。現場へは奈良県と京都府の府県境沿いに、都市再生機構（UR）によって宅地開発が進む一帯を横目に歩きますが、そこでの景観の違いや変化を見るということも、この日のフィールドワーク学習の一環となっています。

音如ヶ谷公園を視察地とした主たる目的は、平城ニュータウン開発の際に発掘された古代瓦窯跡の遺跡（音如ヶ谷瓦窯跡）を都市公園として整備し、保存・展示している状況を見学するというところにあります。

当日はあいにくの雨模様で、体力的にもフィールドワークには厳しい天候ではありましたが、各自が問題意識をもって現場を歩き、多くの知識と情報を得ることができたと思います。そうしたこの日の成果を持ち帰って整理し、学生自身がこれまで地域創造学部で履修した諸科目の授業内容や地域経済コモンズの関連科目との関連性を、自分なりに考えをまとめていくことで、これからの学びにつなげていって欲しいと思います。



音如ヶ谷公園内に展示されている
窯跡の遺構



音如ヶ谷公園内には
複数の窯跡がある



小松原教授より説明を受ける

宇陀市特産品等認定審査委員会

2016年7月4日(月)14時30分より、宇陀市役所3階庁議室において、宇陀市特産品等認定審査委員会が開催されました。本学からは、昨年12月に開催された同委員会より、委員を務めている県大生3名(伊島萌乃さん、稲垣昭則さん、仲健一さん)が出席しました。

この委員会は、宇陀市の農産物を活用した新製品の開発事業や、宇陀市内業者が行う販路拡大事業に対して経費の一部を補助する「うだチャレンジアシスト補助事業」と、市を代表する特産品、優れた商品の名産品を認定する「宇陀市特産品等認定事業」の二つの事業において、申請のあった案件に対して、補助または認定をするのがふさわしいか否かを審査する委員会です。

この日は、「宇陀市特産品・名産品認定申請10件(特産品1件、名産品9件)」、「チャレンジアシスト補助金申請7件(開発3件、販売促進4件)」の申請内容について、審査ならびに協議に加わらせていただきました。

地域の方々からは、「大学生の視点からの審査」ということで本学学生に期待されているところも大きく、委員として参加することに感謝をさせていただいておりますが、本学学生からすれば、地域や行政が地元の産業振興を図るために、どのような流れで特産品化・ブランド化を推し進めていくのか、その取り組みや流れの一端を知ることができるという意味でも、非常に貴重な経験をさせていただいております。



申請品の試食をする県大生
(左から稲垣昭則さん、伊島萌乃さん、仲健一さん)



『宇陀市 特産品・名産品ブック』

地域経済コモンズゼミⅡの学外実習

■ 県立美術館と川西町、三宅町、田原本町

2016年11月17日に奈良県立美術館で企画展『雪舟・世阿弥・珠光…中世の美と伝統の広がり』を鑑賞しました。学生からは、「中林竹洞筆の「子母竜図」は飛び出してくるような躍動感があり、強く印象に残った。ボランティアガイドの方の説明がなかったら、1つ1つの表現に目が向かなかったかもしれない。また、世阿弥直筆の能本を見た時はワクワクした」との感想もありました。そして、連携展示に参加していた、田原本町、川西町、三宅町の歴史や特産品を知るきっかけになり、3町合同の編集になる「磯城の里ウォークパンフレット」をテキストとしてコモンズゼミⅡ(小松原区分担当)の時間を利用し、3回に分けてフィールドツアーを実施しました。12月8日の川西町では、面塚をはじめ様々な歴史遺産を目の当たりにしました。そして同時に町内の2つの工業団地とインフラ整備の状況、役場から結崎駅に至る通り沿いの小学校や住宅団地など、現在の町の人々の暮らしを見られ、地域経済の学習にも役立ちました。さらに12月22日にはグループワークの訓練を兼ね、メンバー同士連携して、三宅町をくまなく巡りました。そして、2017年1月12日に田原本町を訪問しました。グループ単位で唐古・鍵遺跡とミュージアムを軸に自由に回るとともに、「人生の先達に学ぶ職業・しごと研究」の一環として、役場の職員5名の皆様から人生観・職業観に関する聞き取り調査を行いました。公務員志望が少ない現状にあって、現場に携わる方々からの生の声を聞くことができました。尚、この間には、1月5日のゼミでは「田原本ふるさとかるた」を使って新春かるた大会を行いました。既に読み札と絵札との対応を憶えた学生もありました。次週の田原本町での活動の準備にもなったと思います。



新春かるた大会



田原本町役場での聞き取り

■ バスツアーの研究

コモンズゼミⅡ(小松原区分担当)では後学期、継続的に標記テーマに基づく共同研究に取り組んでいます。15名の受講学生が5グループに分かれ、それぞれのグループごとにバスやツアーに関する問題を掘り下げています。例えば、バスツアーそのものを研究対象にしたものを次に一つを紹介しておきます。

(地域経済コモンズ 教授 小松原 尚)

長島リゾート なばなの里の観光体験調査

■ ツアー参加者の客層

私たちは2016年12月26日にナガシマスパーランド、ジャズドリーム長島、なばなの里を巡るバスツアーに参加しました。バスツアーの参加の客層としては、家族連れが2組、カップルが7組、友達同士が1組参加していました。予想としてはクリスマス後なのでカップルが少なく、冬休み期間なので学生が多いのでは、と思っていましたが実際はほとんどがカップルで参加をしていたことに驚きました。同ツアーでも中で細かく分けられているようで、牡蠣食べ放題プランや温あみチケットつき、金券付き、ナガシマスパーランド乗り物乗り放題券付プランがありました。その内、私たちは乗り物乗り放題券付プランでした。

■ ナガシマリゾート内ジャズドリーム長島

まず初めにジャズドリーム長島という名前のアウトレットパークへ向かいました。名前の通り全体的にジャズがモチーフになっていました。また、全体的にジャズが流れていました。木曽三川の河口という立地に着目し、ミシシッピ川下流域の港町ジャズの発祥地とされるニューオリンズの街なみをイメージしているそうです。11:30頃施設内で昼食をとりました。少し早い時間だからか客はまばらであり、客層は主に小さい子供連れの親子でした。



アウトレットパーク



昼食の様子

■ ナガシマリゾート内の客層の比較

昼食を取ったあとアウトレットパーク内を散策しましたが、ナガシマスパーランド、なばなの里との客層を比較したところ、ナガシマスパーランドの主な客層はカップル、冬休み中の学生が殆どでした。小さい子向けの乗り物が少ないためか親子連れはあまり見られませんでした。そして、なばなの里も同様カップルが一番多く他の施設ではあまり見られず、外国人の方もちらほら見られたくらいでした。それに対しアウトレットパーク内ではカップルは殆どおらず、親子連れや学生ではない友達同士が多かったです。一人の人も多かったので、他の施設には寄らず純粋に買い物を楽しむために来ている人が多いようでした。

アウトレットパークを一巡した後には長島スパーランドで十分に楽しみ、そしてなばなの里のイルミネーションで癒されました。今回私たちが参加したバスツアーは一日でナガシマリゾートを十分に満喫できるととても良いツアーであると思いました。(地域経済コモンズ 3年生 新川 琴理)

奈良県下中小企業訪問調査

～自動車販売・整備業を主に～

■ 地域の企業を知る

2016年9月2日に地域経済コモンズの二年生と一年生が小松原・山部の二人の教員とともに、企業訪問および調査を実施しました。今回の訪問調査は中小企業団体中央会主催で、奈良県の企業の魅力発信活動の一環として行われています。実際に奈良県下の自動車販売・整備業を見学し、お話を聞くことができました。はじめに訪問したのが奈良県天理市にオフィスをかまえる株式会社ファーストグループです。ここでは自動車整備業界の現状と、実際に整備・修理工場の見学および聞き取りを行いました。自動車整備をメインの事業にすえており、車の販売、さらには直営のカフェレストランも経営されています。奈良市押熊に出店の際は、カフェ風のおしゃれな外観にし、子供向けのスペースを設けた設計の話がされていました。それは



整備業務を知る

この地域周辺が住宅地として開発された場所で、若いファミリー層に訴求する重要性があるからです。ファーストグループさんによれば地域によって客層が異なるのでそれにあわせて店づくりを変



窓口・販売業務の説明を受ける

えているとの事でした。これは地域によって顧客に訴求方法を変えるエリアマーケティングの実践といえるでしょう。その他、地域とのかかわり方を踏まえた活動がみられました。例えば、本社オフィスは天理の商店街の中に立地しています。大阪市内等の他の選択肢がある中、あえてこの地に中心となる事業所を置いたのは、この場所は大学生の人通りが多く、商店街の活性化を目的としているからと説明されていました。

■ 企業の理念を知る

つぎに訪れたのは奈良トヨタ自動車株式会社です。ここでは奈良トヨタのサービス精神や理念を中心に話を聞きました。中でも整備士としての技術とモノづくりの誇りを持ってもらうプロジェクトとして初代クラウンのレストアの様子を収めた動画を閲覧しました。このプロジェクトの最後は完成したクラウンで奈良からトヨタの本社がある名古屋まで走行していき、顧客に長く愛される車づくりとサービスを体現したものになっています。

歴史的なプロジェクトがある一方、トヨタの最新技術の結集である水素自動車「MIRAI」に同乗す

る機会もありました。MIRAI は奈良県下に 2 台しかない貴重なもので、学生も「静か」「スムーズな加速」といった感想を漏らしていました。企業訪問時点では、奈良県内でまだ購入された方はいなかったそうですが、将来水素ステーションが整備され普及し始めたら、水素自動車という選択肢が当たり前の時代になるかもしれません。



水素自動車の説明を受ける

■ 課題を知る

最後に訪問したのが奈良トヨペットです。奈良トヨペットはトヨタの他の販売店と比べ顧客層は 50 代が中心であり、トヨタの商品構成の中でも価格が高めの商品を取り扱っている販売店です。奈良トヨペットの今後の方針は 30 代といった若い方をターゲットにマーケティング活動を行っていきたいとのことでした。それは今後市場が先細りする中で、新しい市場を開拓する必要性からです。そのような自動車市場を取り巻く環境の中、奈良トヨペットの社員さんが話されていたのは、「若者のクルマ離れと言われているけれども、そもそも若者のクルマ離れとは何か、じっくり勉強をする機会がないので知りたい」とおっしゃっていたことです。こういった何気ない話の中でも、常識をあらためて捉えなおして考えるネタが転がっています。活動を通じ実社会に触れる中、テーマを見つけ出し、実りある学習および調査研究を行ってほしいというのが教員の気持ちです。



報告に向けた準備の様子

■ 成果報告とコモンズにおける学習

地域経済コモンズは地域を生活の場であり、生産、雇用、消費、流通、といった経済活動の場であると捉えています。今回の企業訪問及び調査は実際に地域で経済活動を行っている方々からのお話を聞き、事業活動を知る良い機会になったと思います。

今回の活動は会社を訪ねて話を聞くだけではなく、学生が自身の興味や必要に応じて収集したデータをまとめ、奈良県中小企業団体中央会に報告していきます。学生は自動車整備のきつい・汚いという否定的なイメージを覆し、男女ともに取り組める魅力のある仕事であると捉え、報告会で見事、最優秀賞に輝きました。このような活動を通じ、自身で考え、行動する自主性を地域経済コモンズでは実践的に養っていききたいと思います。

(地域経済コモンズ 専任講師 山部 洋幸)

生産の現場を学ぶー食品工場の見学ー

アサヒ飲料株式会社明石工場とヤクルト本社三木工場

2017年2月14日に地域経済コモンズの2年生（執筆時3年生）が小松原・栗村・津田・山部の4人の教員とともに、学外学習を実施しました。訪問先はアサヒ飲料株式会社明石工場（以下、アサヒ）とヤクルト本社兵庫三木工場（以下、ヤクルト）です。結論から述べれば、学生の1人は「今回、2つの工場を見学して、工場見学には様々な工夫と気配りが大切なのだと分かった。そして会社によって、製品によって工場の仕組みは大きく変わるのだと理解した。」と、成果を報告しています。アサヒとヤクルトは飲料という同じ性質のものを生産していると捉えがちですがどのように違うのでしょうか。アサヒでは「三ツ矢サイダー」、「十六茶」、「WONDA」といった様々な飲料を生産しており、ペットボトル飲料、缶飲料を主体に生産しています。一方、ヤクルトではヤクルトの原料液、「ミルミル」、さらには「ソフール」といったヨーグルトも生産しており、製品の中心は培養した菌から展開されていることがわかります。結果、見学についても違いがみられました。アサヒでは、自社ブランドの飲料の歴史およびペットボトルと缶のリサイクルの取り組みが伝わる見学であったのに対し、ヤクルトでは菌の効用と歴史、従業員の服装が2種類あり、髪の毛やほこりが入らないよう工夫された制服やロッカーも3つ用意するといった衛生管理が伝わる見学であったといえます。

今回の学外実習では実際の事例を比較し、考察するというプロセスで、共通点は何か、相違点は何かという視点から物事をとらえる学習であったといえるでしょう。

（地域経済コモンズ 専任講師 山部 洋幸）



アサヒ：炭酸飲料の歴史の説明を受ける



ヤクルト：ゲームを通じて菌を学ぶ



ヤクルト：CMのキャラクターを模型で表現

基礎ゼミでの奈良市内の野外活動

—大学近隣地域の観察—

4月27日2限目を利用して、学習空間環境調査を実施しました。佐保川沿いから大学の西側の崖の植生を観察、ガラガラ池の碑を通過、近鉄油阪駅跡、さらに登大路を東へ進み近鉄奈良駅周辺や東向商店街の古写真(入江泰吉「昭和の奈良大和路」などをテキストとした)と現在とを比較、その変化をみました。県庁東のバスターミナルの工事の様子も遠望観察しました。最後は、ファーストフード店での観察活動を行いました。

学習空間環境調査は、学生を調査補助として活用し、学生自らの目線により、対象地での学習活動の環境調査のみならず集合から目的地まで、その往復途上も含む調査活動です。学生からの調査報告に基づき、活動状況の報告をします。

大学(学校)教育にあっては何よりも学生の安全に関して最大限の配慮がなされるべきです。そして、学生自身もこの点からの関心を持つ必要があります。この点を移動中における観察報告より確認してみたものを次に記します。「大学から交差点へ出ると道幅が広く感じられ自動車の流れは良好であったが、歩道は少し狭く感じた。車道が大通りで車の数も多いため、自転車も歩道を走ることが多い。また、途中にはバス停もあるので更に狭く感じ、今回のように団体が通るとどうしても道幅いっぱいスペースをとってしまうので、歩行者と自転車が快適に通行するためにはより広い道幅が必要」との意見でした。



近鉄油阪駅跡での観察



東向き商店街にて

学外の店舗の利用から得た知見としては、ファーストフード店での観察活動も実施しましたが、店舗におけるインバウンド対応についての観察結果では、外国人観光客の多い観光地の近くにあるため、英語を話せる店員がほとんどだったこと。外国人観光客に向けてのお土産(チェーン店オリジナルのペンケース)コーナーもあったこと。そして、店員さんのように、外国人観光客の方々に対して英語で会話を成立させられるような英語力を身につけたいと思ったことの報告がありました。

また、今回の活動の学生自身の得たものとしては、昔の写真と対応させることで、今では存在しないものでも少しだけ名残があったりするのがいいなと思ったし、昔の奈良の様子を垣間見ることができて良かったです。タイムスリップをしているような感覚で楽しかったです。さらに、一人でいても気づくことができない部分を先生や基礎ゼミのみんなと巡ることができてたのしかったです。という意見がありました。

(地域経済commons 教授 小松原 尚)

「磯城の里ウォークパンフレット」を利用した 三宅町における学外実習について

4月27日(木)3、4限を利用して奈良県三宅町内で野外活動を実施しました。地域経済コモンズでは、2年次生を対象に前学期と後学期にそれぞれ1回ずつ、全体活動をおこなっています。今回は予め設定したチームでのグループワークの取組であり、定められた時間までに作業を完了するという課題解決学習の一環でもあります。当日は天候にも恵まれ、参加の学生には実り多い活動となりました。尚、安全指導教員は小松原尚、栗村俊夫、山部洋幸、下山朗の4名で対応しました。



『磯城の里ウォークパンフレット』電子ブックより



石見(玉子)遺跡展示所にて



ゴール地点(近鉄石見駅)に到着

今回の「磯城の里ウォークパンフレット」を利用した三宅町における学外実習は、「太子道と古墳群のある三宅町を歩きながら地図にない今の街を見つける」をテーマに実施しました。活動目的としては、i) 三宅町を訪問し、観察活動によって地域に対する理解を深める、ii) 自治体が作成した町の紹介地図を利用して町内をフィールドワーク相談担当グループで歩きながら、地図では表現しつくされていないその町の特徴を発見する活動を通して、グループワークの方法を身につける、iii) 地域経済コモンズの関連科目やこれまで自らが地域創造学部で履修した諸科目の授業内容と活動内容との関連性を考える、こととしました。

活動の流れは、近鉄奈良駅、12時26分発の難波・奈良線快速急行に乗車し移動しました。そして、大和西大寺12時31分着(乗換)12時35分発、石見駅、12時56分着しました。そして、13時にグループごとに出席確認と3限用のワークシートの課題発表、課題送信の後、出発しました。最後は16時10分、石見駅で解散しました。

活動内容は、三宅町のフットマップを利用したグループ活動による地域発見の旅であり、必ずグループで一緒に行動しますが、担当教員と一緒に歩くかは各グループの判断に委ねました。また、活動においては、地図の各地点の中で、予め定めた必訪問地4か所を含む10か所以上を訪れるラリー形式を採用しました。コースの設定はグループの合議に委ね、時間内に効率よく回れるように自主的に考えることとしました。立寄地点に着いたら、グループ全員の集合写真を撮影し、それを予め指定した小松原のメールアドレスまで添付送信するように指示しました。各グループの活動の一端が伺える内容になっていました。

(地域経済コモンズ 教授 小松原 尚)

三宅町学外実習に同行して

2017年4月27日に行われた「磯城の里ウォークパンフレット」を利用した三宅町における学外実習に、一教員として自分の担当する学生と行動をともにしました。そこから感じたこと、教育的な効果、観光地としての課題について触れていきます。例年、地域経済コモンズでは学外実習の取り組みが行われています。今年はウォークパンフレットを利用して3時間の観光地視察をしました。グループごとに決められたチェックポイントを回りながら観光地を見ていきます。近鉄橿原線石見駅を出発し、太子道と古墳群のある三宅町を東西南北、端から端まで歩いて回りました。

写真にあるとおり、女子学生5人のメンバーであったこともあって、少しゆったりとしつつも男子学生とは少し目線が違う発見もありました。私はもともと奈良県に縁があまりなかったため、子どもの頃に習った歴史上の人物、あるいは場面が登場するこの街の史的な奥深さを感じていましたが、彼女たちは、万葉歌碑の広場にある日光を受けて御影石にハートの影をうつすモニュメントに感動するなど、世代や個人で異なる目線で地域と触れあえる楽しみが発見されました。



万葉歌碑にて



白山神社にて

この学外実習は、観光客目線にたって体験はしているものの、決して観光気分だけを味わうものではなく、そこから学びを得ていくものです。そのために、メンバーはそれぞれテーマを決めて報告書を作成するなどしています。良いなあでは終わらない課題の発見は、その後の図書館やパソコンの前での学習にも役に立つと思います。

最後に、私が感じた観光地としての課題を少しだけ挙げておくと、パンフレットはしっかりと綺麗に作られているものの、観光客にとってどの道が安全か、道中の目印がなにかないのか、また相当距離的なボリュームがあるのでもう少し絞ったおすすめコースもできないものかという3点を感じました。これからも学生は様々な視点、立場から勉強を続けていき、より専門的な学びにつなげていって欲しいと思います。

(地域経済コモンズ 准教授 下山 朗)

学会や生協との連携による学習環境の創造

■ 奈良地理学会のエクスカージョンへの参加

2017 年 10 月 8 日（日）に「川西町の歴史と産業」をテーマにした奈良地理学会のエクスカージョンに参加しました。本学学生は、地域経済コモンズ2年生6名でした。この学外活動の目的は、①奈良地理学会の作成した巡検記事を活用し、川西町への理解を深める。②自治体が作製した町の紹介地図を利用して町内を歩きながら、その町の特徴を観察する。③地域経済コモンズの関連科目やこれまで自らが地域創造学部で履修した諸科目の授業内容と活動内容との関連性を考える。という設定で臨みました。午後 1 時に近鉄結崎駅に集合・出発しました。奈良教育大学大学院生の方からは結崎ねぶかに関するご説明をいただきました。学生の報告書をみると大和野菜として売られている結崎ネブカを出荷される前の状態で見る事ができ、ネギが見た目がみすばらしく戦争時を思い出させるという理由で育てられなくなり、近年になってもう一度育てられるようになったことなど、結崎ネブカの歴史について知ることができました。またネギの出荷期間が長いことなど、ネギの生態についても知識を得られました。というような勉強になったことがわかります。



大学院生からねぶかの解説を受ける

■ 再生エネルギーとならコープ

10 月 13 日（金）に奈良県生活協同組合連合会主催になる再エネ施設見学会に参加しました。近鉄大和八木駅南口から 9 時に出発しました。本学の学生は地域経済コモンズの 4 年生が 1 名参加しました。主な訪問先は、木質ペレット製造工場（吉銘田原本工場）、木質ペレットボイラーを



小水力協議会の皆さんとの懇談

稼働している南奈良総合医療センター、そして今年 7 月に発電を開始した小水力発電所である東吉野つくばね発電所でした。参加の学生からは、木質ペレットの製造で「まだまだコスト面で問題があることや、自治体からの要望と補助金とのやりくりが大変そう」、そして、ペレットの利用に関して「興味深かったのは、木質ペレットはコントロールしにくいということ。重油のほうが使いやすいとのことであり、まだまだ改善の余地があると感じ」、さらに、「つくばね発電所における

地域活性化は今までの勉強の中で触れてきたやり方とは少し違うものであり、しかしながらそこにある資源を活用するという部分においては共通点もあるなど大変興味深かった」という報告を受けました。これから卒業、就職を控え、少しでも自分自身が環境問題やエコといったものに関心をもつ良いきっかけになったことでしょう。（地域経済コモンズ 教授 小松原 尚）

芸術鑑賞・作品検証を通した奈良への理解

■ 県立美術館にて特別展「没後 40 年 幻の画家 不染鉄展」を鑑賞

2017 年 11 月 2 日（木）の 2 限目を利用して小松原担当の基礎ゼミにおいて学外活動を実施しました。活動の一つは県立美術館での特別展の鑑賞です。美術館作成のパンフレットによりますと、不染は伊豆大島から京都、奈良へと各地を転々として過ごした経歴や、緻密に描き込まれた富士



県立美術館玄関前にて

の絵など独特の作風がありますが、その画業には未だ不明な点も多い「幻の画家」です。学生に感想を求めると、家屋の絵はシンプルな配色で自然を描いた絵は色鮮やかに描かれていたこと、四季を描いた絵が多かったこと、特に今の季節との関連で秋を描いた作品が印象に残ったようです。また、美術など絵をかくのが苦手な学生からは、5・7・5 で「わたしには 無い感性が 素晴らしい」という感想がだされ、墨であんなに細かい表現

ができて、同じ人なのにすごいと思った。色のつけ方などもすごかったと句の説明がありました。尚、安堵町 黒滝村 岐阜県高山市 市町村交流 連携展示も見学しました。

■ 入江泰吉の主題による時空を越えたツアー体験

入江泰吉の作品は、カメラを絵筆のように駆使し、時には鮮やかな色彩に、またある時は水墨画の趣を出すという芸術写真としての理解が一般的に思います。一方で記録を念頭においた奈良



寺川商店と神社を観察する

の風景写真も存在します。戦後に入江の撮影した半世紀前のものと現在との比較は地域の構造的変容を理解する上でも助けになり、地域経済の学習にとっても意味のあることに思います。小松原の担当する基礎ゼミでは、『入江泰吉の原風景 昭和の奈良大和路 昭和 20 ～ 30 年代』（入江泰吉記念奈良市写真美術館編、光村推古書院 2011 年）を学外活動のテキストとして利用しています。このことは本誌 11 号 3 頁にても紹介したところです。今回の活動は県立美術館周辺で、67 頁と 28 頁を利用しまし

た。学生の観察報告によると、まず前者では、「新古諸道具 寺川商店」という暖簾は、当時のままでした。さらに、そこに隣接している神社は当時と変わらない景観でした。店の外見は全く変化しておらず、外壁のシミなども当時のまま残っていました。また 28 頁では、入江が撮影した当時は吉城川だった所が暗渠化され道路になっていたが、山の形はほとんど変化していなかった。奥の大仏殿も変わらずでした。入江本ツアーはこれからも続きます。

（地域経済コモンズ 教授 小松原 尚）

ビジネスプランコンテストへの参加を通じて

2017 年 10 月 18 日、橿原商工会議所が主催する「かしはらビジネスプランコンテスト」に、サークルとして出場していた本学の学生グループとともに参加してきました。本コンテストは本年度で 3 回目となるイベントであり、今年は 19 グループが応募し、1 次予選を通過した 10 グループが本選に進み、10 月 18 日にプレゼンによるコンペが行われました。創業予定者、地元の企業関係者に交じり、大学生のグループも 3 組出場していました。報告テーマのジャンル分けをすると、観光客を主な対象としたサービス業（飲食、サービス、宿泊）、IT を使った新規サービスの開発、地域の課題解決型サービスの 3 つになります。私に関わった本学サークルの学生たちは、観光客を主な対象としたサービス業のうち、外国人観光客向けの料理体験型飲食店サービスに関するプレゼンを行いました。夏休みに入って以降、週に 1、2 回ぐらいは、グループで集まるときに参加して、本番直前のプレゼンの指導などを行いました（写真左）。

参加した学生は全員 1 年生であり、地域経済コモンズの学生ではないのですが、私が地域経済コモンズの教員であることから、経済学や統計学の勉強をした成果を図表化し、1 年生とは思え



日曜日の練習風景



当日の報告の様子

ない堂々とした発表をしていました。残念ながら入賞することは出来なかったのですが、社会人に混じって、それに負けないぐらい（私の感覚ですと、全体の 1 位あるいは 2 位でした）素晴らしい報告、プランでした（写真右）。このように自分たちのホームグラウンドではないところに挑戦し、またグループで活動するという取り組みは有意義であり、これからも積極的に支援していけたらと思っています。

ただ参加して少し残念だったことがあります。かしはらビジネスプランコンテストは、審査の基準が非常に曖昧であり、またプレゼンの際に質疑応答がなく提案者に対するフィードバックがほとんどなかったことです。学生に対して次への意欲や改善点をきっちりと伝えることは、教育効果の上で重要な課題です。外部の団体による様々な企画はありますが、教員としては教育効果も高く地域への貢献も高い取り組みはないか、仕組み作りは出来ないか、そういった点もしっかりと考えていきたいと思います。

（地域経済コモンズ 准教授 下山 朗）

地域をフィールドとした教育と調査

～宇陀市における調査を通じて～

奈良県宇陀市では薬草協議会という連携主体を形成し、歴史ある薬草の地として、薬草の生産に取り組んでいます。薬草協議会の構成員は、県、宇陀市、生産者からなります。本稿では宇陀市を対象とした地域における教育と調査について、今回、「湯揉み」と呼ばれる活動に焦点を当てました。「湯揉み」とは収穫された、大和トウキの根を出荷前に洗浄することであり、薬草協議会が中心となって実施しています。調査においてはまず問題意識をもつことがスタートとなります。

文献を参考にし、問いを立てました。参考にした資料は奈良県立大学ユーラシア研究センター事務局編『EURO-NARASIA Q』の第4号に掲載されている記事です。タイトルは「命の源にかかわっているのですから。ー農業という奈良・宇陀の地域資源」であり、この記事をもとに問いを設定してきました。本記事のインタビューイは薬草協議会の中心的人物である山口武氏です。この記事の中における「湯揉み」についての内容をまとめますと、「湯揉み」は機械でできないこともないのですが、伝統的なトウキづくりの継承として行

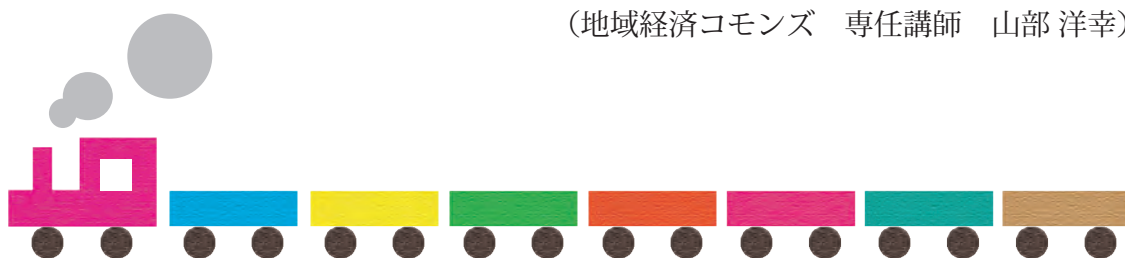


「湯揉み」の体験

っているとされています。これら記述を参考に学生は問いを用意し、「湯揉み」活動に参加しました。その問いは次のようなものです。「合理性があまりないように見える湯揉みはどの地域でも行われる単なる「作業」ではなく、「その地域独特の作業」となっているのではないか。そこから、その作業がある種の文化的な要素を持つようになり、参加者の中では、その作業が守るべき存在となり、大和トウキを中心とした薬草産業への住民の参加が、より一層促されている可能性がある。」

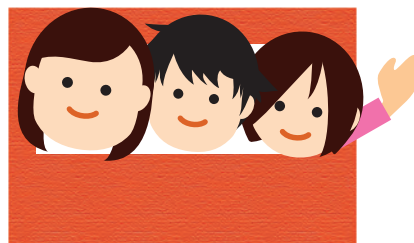
学生は実際に「湯揉み」に参加して、協議会の方に聞き取りし、「湯揉みはこのあたりの地域の文化をもとに行われており、はじまったばかりである。これから「その地域独特の作業」になっていくものだと考えられる。今後は、こうした作業が「地域独特の作業」となる過程をここから見ることができるかもしれない。そして、住民の意識と伝統産業にどう働きかけていくのか、観察できる可能性がある。」という一つの結論を出しました。本活動において、学生は自身で文献を読み、問いを立て、その問いに沿って、聞き取り調査を実施し、結論を導き出すという一連の研究調査活動のプロセスを把握できたのではないかと考えられます。今後も学生の自主的な活動の機会を提供していきたいと思っています。

(地域経済コモンズ 専任講師 山部 洋幸)





為せば成る
為さねば成らぬ何事も



 **奈良県立大学**

地域創造学部

地域経済コモンズ



奈良県立大学地域経済コモンズ学びの情報誌

〒630-8258 奈良市船橋町 10 番地

TEL 0742-22-4978

FAX 0742-22-4991

お問い合わせは 月曜日～金曜日の
午前 9 時から午後 5 時まで

<http://www.narapu.ac.jp/>

2017 年 12 月 15 日発行